

過敏型自己愛の傷つきの緩和の特徴の検討

中山 恵里

(広島大学大学院人間社会科学研究所)

序論

過敏型自己愛とは自己卑下的で他者の反応や評価に敏感な特徴をもつ性格特性である。文化的背景から日本人に多いとされる過敏型自己愛は、自我脅威場面や失敗場面において、恥や評価過敏が生じ、回避欲求が高まるとされる(市川・外山, 2016)。他者評価に依存し、自己の価値や存在意義に関連した不安や傷つきを感じやすいため、不適応な行動に結びつきやすい。ただしそのような過敏型自己愛の、傷つきを自分自身で緩和したり処理することに関しては明らかになっていない。

そこで、本研究では過敏型自己愛の「傷つきの緩和」に着目し、その特徴を検討した。「傷つきの緩和」を個人内と個人間の過程に分け、個人内の要因としてセルフコンパッションを、個人間の要因として援助要請スタイルとの関連の検討を行うこととした。セルフコンパッションとは、困難に直面したり苦痛を感じた際に自分自身に対して思いやりを持って接すること(Neff, 2013)、援助要請スタイルは自分自身で対処できない場合に他者に援助を求める程度(永山, 2013)である。

研究の目的

過敏型自己愛の傷つきの緩和や処理に関する特徴を明らかにすること。

仮説① 過敏型自己愛は失敗などによって自分自身が傷つくことを恐れる傾向があることからセルフコンパッションの低さを予測する

仮説② 過敏型自己愛は悩みを抱えたときに自分では対処しきれないため、些細なことでも相談する援助要請過剰を予測する

方法

調査対象者 大学生・大学院生 84名(女性 61名, 男性 23名) 平均年齢 20.41±1.27歳

質問紙 ①自己愛的脆弱性尺度短縮版(上地・宮下, 2009) 20項目, 5件法②日本語版セルフコンパッション尺度(有光, 2014) 26項目, 5件法④援助要請スタイル尺度(永井, 2013) 12項目, 7件法

分析 因子分析を用いて因子数の確認, 説明変数を過敏型自己愛, 目的変数をセルフコンパッション, 援助要請スタイルとした重回帰分析を行った。

結果と考察

各尺度について因子分析を行なった結果、自己愛的脆弱性尺度から「潜在的特権意識」「自己顕示抑制」「自己緩和不全」「承認過敏性」の4因子、援助要請スタイルから「援助要請過剰」「援助要請回避」「援助要請自立」の3因子が得られた($\alpha > .75$)。セルフコンパッションは先行研究(有光, 2014)と同様に主成分法を行なった。

仮説①に関して、過敏型自己愛の「承認過敏性」と「潜在的特権意識」がセルフコンパッションを有意に抑制した。「自己顕示抑制」はセルフコンパッションを有意傾向で抑制した。他者から褒められたり認められないと自分に自信が持てない「承認過敏性」や他者に対してもっと自分を尊重してほしいと感じる「潜在的特権意識」、自己顕示に恥が伴う「自己顕示抑制」は、良いことも悪いことも他者の反応や評価に依存しているという特徴を持つ。この他者評価に依存的な要因が、失敗した自分を労わり苦痛に満ちた考えや感情をバランスのとれた状態にしておくなど、自分自身で傷つきを緩和することを難しくすると考えられる。したがって仮説①は支持された。

変数名	セルフコンパッション	援助過剰	援助回避	援助自立
潜在的特権意識	-.245 *	-.082	.108	-.121
自己顕示抑制	-.212 +	-.218 **	.270 **	.197
自己緩和不全	.076	.750 **	-.730 **	.150
承認過敏性	-.290 *	-.033	.196 *	-.282 *
R^2	.286 **	.585 **	.556 **	.088

** $p < .01$, * $p < .05$, + $p < .10$

図1 重回帰分析の結果

また仮説②に関して、「自己緩和不全」は援助要請過剰を有意に予測した。一方で「自己顕示抑制」は援助要請回避を有意に抑制した。仮説②は一部支持され、自己緩和不全傾向が高いと、他者を過剰に頼るが、自分自身で問題解決のための努力を行わないことが考えられる。しかし自己顕示に恥が伴うような傾向が高いと、他者に自分の弱みとなる部分を見せることに抵抗感があり、他者を頼らない傾向があるのではないかと考えられる。